

ご挨拶

第 17 回国際運動免疫学会シンポジウム大会長

早稲田大学スポーツ科学学術院教授 鈴木克彦



このたび、運動と免疫・炎症を中心にスポーツ科学、健康科学をはじめ医学全般にわたって世界約 20 か国から専門家にご参集いただきまして[第 17 回国際運動免疫学会シンポジウム](#)を開催させていただくことになりました。今まで準備にご協力いただきました方々に厚く御礼申し上げます。

今回のシンポジウムのテーマは「[運動免疫学：科学的根拠から実践応用へ](#)」を掲げておりますが、免疫・炎症とその調節機構に関する基礎研究から最先端の分析技術、栄養、発育、老化、生活習慣病、がん、暑熱環境やストレスと予防対策、臨床的諸問題まで学術セッションが用意されており、それぞれの座長や招待講演者をはじめ若手研究者や大学院生の最新の研究発表と質疑応答をご覧いただき、本研究分野の進歩を実感いただけるものと確信しております。ランチョンセミナーでは、機能性食品分野から免疫プロテイン (1) や検査分野から酸化ストレスマーカー (2) について協賛企業の情報提供もあり、この分野の実用性についても参考にしていただけるものと思います。

コロナ禍で免疫の重要性に関して理解が深まったところではありますが、**免疫機能を高めるための運動の重要性**が科学的にも検証されつつあります (3)。また、昨今の地球温暖化によって熱中症が多発しておりますが、その**全身性炎症と臓器傷害のメカニズムや対策**について関連する発表もございます (4)。さらに、がん患者の治療に運動を併用すると副作用が軽減したり治療成績がよくなり、がんの再発防止にも運動が効果的なことがわかってきており、運動の抗炎症作用 (5) やマイオカインの関与 (6) について証明されつつありますが、本シンポジウムでは腫瘍免疫の詳細について最新知見の発表が期待されます。最終日の午後には、運動とがん治療に関する市民公開講座も開催されます。

運動免疫学の研究が盛んになり始めた四半世紀前には、臨床的にも運動の重要性が議論され始め (7)、それ以降に疾病予防や医療の現場で運動処方が普及してきたところで免疫学的理解も進みつつありますが (8)、最新情報の共有と今後の本研究分野の発展や臨床応用、社会実装のために皆様のご参加をお待ちしております。

参考文献

- (1) Ma S, et al. [Effects of an 8-week protein supplementation regimen with hyperimmunized cow milk on exercise-induced organ damage and inflammation in male runners: a randomized, placebo controlled, cross-over study](#). *Biomedicines*, 2020; 8: 51.
- (2) Kobori H, et al. [The utility of a small animal grip strength measurement device as a model for studying exercise-induced muscle damage](#). *Antioxidants*, 2026; 15: 23.
- (3) Suzuki K, Hayashida H. [Effect of exercise intensity on cell-mediated immunity](#). *Sports*, 2021; 9: 8.
- (4) Suzuki K, et al. [Characterization and modulation of systemic inflammatory response to exhaustive exercise in relation to oxidative stress](#). *Antioxidants*, 2020; 9: 401.

- (5) Khalafi M, et al. [Comparative efficacy of exercise modes on inflammatory cytokines in patients with breast cancer: a systematic review with pairwise and network meta-analysis](#). *Scientific Reports*, 2026.
- (6) Ahmadi Hekmatikar A, et al. [Muscle-tumor crosstalk in exercise oncology: Exercise-induced myokines and cancer cachexia](#). *Cancers*, 2026; 18: 2343.
- (7) 鈴木克彦ら. 運動療法の新しい取り組み—そのメカニズムと有用性について. *Global Standard* の視点からの医療 (39)、治療 84: 165-169, 2002.
- (8) 鈴木克彦. 自然免疫・炎症に及ぼす運動の影響—そのメカニズム. 鈴木政登編集. 健康寿命延伸に寄与する体力医学. 別冊・医学のあゆみ. 東京: 医歯薬出版株式会社: 68-73, 2020

<がんと運動WG主催 市民公開講座>
in国際運動免疫学会シンポジウム

筋肉はあきらめない!

**参加費無料
申し込み不要
直接会場にお越し下さい**

がんでも、運動してイイんです

2026年8/30(日) 14:30-16:20(14:00開場)

早稲田大学 国際会議場井深記念ホール
(東西線「早稲田駅」徒歩10分)

- ・ がんと運動の効果、および本WGの取り組みについて
谷本道哉 (順天堂大学スポーツ健康科学部)
- ・ 術前化学療法における運動実践の効果
岡田健一 (東海大学医学部消化器外科)
- ・ エビデンスに基づいた現場での実践
奥松功基 (リオールジム代表)
- ・ 運動が好きではない方でも継続できる運動方法
田尻寿子 (県立静岡がんセンター)
- ・ 質疑応答: 会場からの質疑にできる限りお答えします
座長: 永富良一 (東北大学大学院医工学研究科)

